

長崎唐人屋敷と新地荷蔵

大東 良平

唐人屋敷の完成は一六八九年(元禄二)であった。江戸幕府は菓草園のあった長崎十善寺郷の地に木造家屋数十棟(後に二〇〇)を建て、煉塀や竹矢来で囲まれた六、八〇〇坪(二二、四七九㎡)に唐船の人達四、八八八人を集めた。以後、屋敷の広さは次第に拡張され、一九世紀初頭には九、三三三坪(三〇、九八五㎡)となり、屋敷内には居住家屋二〇棟や番所・乙名部屋・牢屋などがあつた。一ノ門と二ノ門の間の広場では食料品や日用品が売られ、屋内では役人・唐通事立会いのもと輸出品の取引も行われていた。主な輸出品は銅・俵物(干鮑・煎海鼠・鱧鱈)、輸入品は生糸・砂糖であつた。

屋敷内に入るには先ず広馬場から一ノ門を通り、二ノ門をくぐって役人や遊女が入りし、特に二ノ門の番人は入ろうとする者を厳しく取り締まっていた。

一六三五年(寛永一二)長崎開港以来始まった長崎と中国との貿易は、二〇〇年も経過すると密貿易が多くなり、街には混血児が六人に一人という状態になった。長崎奉行は、これ以上長崎の人口の変化を悪化させないためにも中国の人



象徴門(大門)

達を隔離する必要があつたので唐人屋敷を造る事となった。唐人屋敷造成前の長崎は外国人と国内諸国の人々も混在していたので大いに秩

序が乱れ、奢侈な生活や節度がない人も多く、町の風俗は著しく乱れていた。また密貿易やキリスト教を取り締まる諸役人達の中には、袖の下や八朔札(御中元)を商人達から貰い、屋敷内の色々な行事への参加も強要していたと言われる。

唐人屋敷造成後、屋敷内に住む唐船の人々の楽しみは、長崎四福寺と言われる興福寺、福濟寺、聖福寺、崇福寺への自由な参拝であつた。また、近所に住む本籠町の人達に籠踊りを教えてもらい、長崎くんち奉納踊りにしたそうである。館内の唐人さん達の生活ぶりは、貿易の盛況さと共に羽振りが良く、中国商人に近寄ってくる長崎の人達も多くいたと言う。

長崎に於ける中国の影響は多く、夏の精霊流しでは魔除けの意味で鳴らす爆竹、墓内に建てる「土神」の石碑、お盆に墓内で飲酒することなどがある。現在の唐人屋敷内には一八六八年(明治元)に建てられた福建會館、それ以前に建てられた土神堂・天后堂・観音堂があり往時を偲ばせている。また、屋敷外にも一七八四年(天明四)天明の大火後に建てられた国指定重要文化財「唐人屋敷門」(長崎市所有)が興福寺境内に移築保存されている。

天明の大火後、一七八七年(天明七)に屋敷内の建物は再建されたが、安政の開国一八五九年(安政六)により中国の人々は屋敷内より散在し、屋敷は廃墟化し、さらに一八七〇年(明治三)の大火で建物は焼失、屋敷内の住人は近くの十人町や新地荷蔵(現新地中華街)に移住した。唐人屋敷はその後、民間へ払い下げられ日本人が住むようになった。

一六九八年(元禄一一)には市街地の後興善町から出火した「元禄の大火」は、二二カ町を巻き込み樺島町や浦五島町の土蔵三三棟にあつた貨

風信

○四月と言えば花見であり、私は「かよこ桜」を思い出す。かよこさんのお母様(林津恵さん)が「娘が原爆でなくなつた城山小学校に桜を植えさせて戴きました」とお聞きした。それから間もなく、お母様は引地町(今の桜町)の旧林家宅跡に吉井勇先生にお願ひして「黒龍の碑」を建てられた。其の後、私も縁あつてお母様より「これも、かよ子のかたみですよ」と言われて、林家の家伝であつたと言われる圓山応挙筆の「水墨雲龍図」を戴いた。私は之の名画も原爆を語る物語の一つと考え長崎純心大学博物館に寄贈、保存して戴いている。

○四月八日は「花まつり」であつた。私も町にでて中通りの広場に飾られていた花御堂の中に「おたちになつておられたお釈迦様」に甘茶をそがせて戴いた。○先日、長崎市馬町バーデンハイム長崎親善協会より一八五九年(安政六)十一月長崎に上陸した米蘭改革派宣教師フルベッキの長崎時代の活躍についての研究論文を戴き、あらためてフルベッキ師が我が国に残つた功績について大いに見なおさせられるものがあつた。フルベッキの功績は「幕末より明治期の新生日本国家の在り方」を指導されたところにあると論考されている。

○次の日、長崎県九条の会あり。今年も五月四日みどりの日には第十二回・親子で歩く平和の日としての行事を企画して下さいとの事。早速次のコースを提案、了承された。
コース 午前十時・馬町諏訪神社下集合。―松の森神社を中心(職人尽しほり物・大楠他)―諏訪神社を中心―諏訪公園(グラント將軍碑、元日桜・高麗井・康平社他)。諏訪公園は明治七年九州最初の公園で丸馬場・グラント將軍の碑・山岡鉄舟・吉田健康等の銅像他各種記念碑あり。
特別講師。宮川雅一氏(松の森社中心)、宮田文嗣氏(諏訪社中心)、井村啓造氏(諏訪公園を中心)

○今月ご寄贈いただいた書籍
一、大隈孝一氏(日本アカデミー賞協会員)自著の「日中国交正常化30周年企画 崎華往来」(オフィス限刊・一、一〇〇円+税)
本誌は崎華往来と龍馬精神の二部構成で「史実にもとづいた新事実の発見」とあり大いに参考にさせて戴いた。
一、佐世保史談会より「談林58」を戴いた。肥前風土記に見る相浦地域、佐世保の花街、郷土史はオモシロイ等の論考あり、楽しく読ませて戴いた。

物を焼失し、その損害額は六七億円(銀三三七七貫目・一年間七〇隻来航の唐船二〇隻分)にも上つた。そこで輸出入品を火災から守るため、町の人達は奉行所の命により二年間の歳月をかけ一七〇二年(元禄一五)、出島より少し小さな人口島「碁盤島」東西一二七m南北九一m(三五〇〇坪)を新地町に築き六〇棟の土蔵を建てた。これが「新地荷蔵」で、商人達は安心して取引ができるようになった。現在は新地中華街となり、中華街中央の十字路には新地蔵跡の碑が建っている。

三年前、唐人屋敷入口に象徴門(大門)が設置された。これは唐人屋敷跡内に入ろうとする人達を迎えてくれている。そしてこの門の象徴として造られている「象」は、一七二八年(享保一三)出島に上陸し屋敷内で飼育され、出発するまで中島川畔を散歩し、その後八〇日をかけ將軍献上のため江戸まで一、二〇〇km歩いたという雄のゾウを思い出す。

さて、華僑の方々の年中行事である旧正月の春節祭は、長崎市が肩入れし長崎ランタンフェスティバルとして一九九四年(平成六)より規模を拡大させ、年々盛況になつている。今年は一〇〇万人超の来場者があり、唐人屋敷会場のメイン通りには、唐人屋敷蹟在化事業により明治二六年建築の土蔵「蔵の資料館」を整備し、道路も拡張された。

江戸時代以来、日本中から注目的となつた長崎には、遊学の若者を始め沢山の人々が押し寄せ、目の当たりにした長崎の見慣れない光景を見て、きつと吃驚したのではないだろうか。当時の長崎は日本の西の果ての地でありながら、異国人も日本人もみんな元気で活気づいており、現在も「長崎学」には多くの関心が寄せられている。

「長崎に足を運べば、良いものや良いことがある。」と誰からも思っていただき江戸時代の長崎のように賑いある場所としたものだ。

現在、松が枝埠頭には数多くの大型旅客船が来航している。国内外問わず「異国情緒あふれる、歴史豊かな国際観光都市長崎」へ日本中から、また世界中から来て頂ければありがたいと思う。

(長崎歴史文化協会 理事)

長崎歴史文化協会研究室

TEL 八二二一―一五四〇
十八銀行公会堂前出張所 2F

